

氏名	朱 鳳
学位の種類	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博第229号
学位授与の日付	平成16年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	モリソンの『華英字典』に関する一研究—その百科全書的な特徴およびヨーロッパ漢学史における位置づけについて

論文調査委員 (主査) 教授 阿辻哲次 教授 愛宕元 助教授 赤松紀彦

### 論文内容の要旨

本論文は、最初に中国大陸に上陸したプロテスタント宣教師として、また最初に聖書を中国語に全訳した人物として知られるロバート・モリソン (Robert Morrison, 1782-1834) が著した『華英字典』(1823年成書) についての研究である。

モリソンは中国キリスト教史における重要人物として、これまでその生涯や宣教師としての活動、あるいは聖書翻訳活動などに関して、いくつかの研究論文が公刊されてはいるが、その代表的な著述である『華英字典』については、まだ研究がほとんどなされていないのが現状であった。

『華英字典』の編纂は、モリソンの中国における滞在期間を通じてもっとも精力を傾注した仕事である。彼は自分に続いて渡来する宣教師たちのために中国の文化と言語を西洋に伝達する使命感に燃え、望みうるすべての努力を注いで字書を編纂した。その結果は、中国での字書編纂史の流れの側から検討しても、西欧人が達成した初期の業績の中で、もっとも重要な位置を占めるものとなった。

しかしそれにもかかわらず、これまでおこなわれてきた『華英字典』についての研究は、中国における金属活字印刷史研究の分野でしばしば言及される程度にとどまり、『華英字典』の詳細な内容や、ヨーロッパ漢学史における『華英字典』の位置づけに論及する研究はほとんど見あたらない。

本論文は全3章から構成され、第1章「モリソン以前の漢語字典及び『華英字典』誕生への軌跡」では、モリソン以前のヨーロッパにおける漢語辞典編纂の歴史を振り返り、『華英字典』がそれ以前のどの辞典にも見られない規模をもち、とりわけ文字の単純な釈義や用法以外に膨大な中国文化情報を含んでいるものであることを示す。

第2章「『華英字典』の百科全書的な特徴」では、『華英字典』にみえる『論語』と『詩経』を中心とする諸文献、および科挙や「孝」の概念など、西洋人から見て興味深く感じられる中国独自の文化や制度に関する百科情報をとりあげ、それがどのように記述されるか、その意識と記述方法を通じて、『華英字典』が幅広い百科全書的な関心のもとで編纂されたことを具体的に示す。

第3章「19世紀までのヨーロッパ漢学の主要業績からみるモリソン『華英字典』の位置づけ」では、19世紀までのヨーロッパにおける四書五経の翻訳に関する主要業績を振り返り、『華英字典』によってはじめて翻訳された四書五経の部分、および『華英字典』によってはじめて英訳された四書五経の部分明らかにするとともに、16世紀から19世紀までのヨーロッパ人による科挙の記述をたどり、科挙について『華英字典』が深い観察と質の高い情報を提供していることを述べる。

『華英字典』には、儒学の経典から俗語で書かれた小説まで、あるいは天文地理の知識から廣東における書物の値段まで、さらには殷周の王にまつわる伝説から民間の婚姻風習まで、ありとあらゆる中国の情報が含まれている。そこにはすべての中国文化を西洋に伝えようとするモリソンの努力が凝縮されている。ヨーロッパ漢学史上、個人によって成し遂げられたこの総合的な仕事をもつ先駆的な意義をもっと高く評価するべきである、と本論文は主張する。

## 論文審査の結果の要旨

本論文が採りあげた書物の著者ロバート・モリソン (Robert Morrison, 1782-1834) については、これまで主として西洋の学界で、キリスト教史における東洋布教活動研究の一環として、あるいは宣教師による聖書の翻訳活動に関する研究において、しばしば言及されることがあったが、その著述『華英字典』については、研究面でのスポットライトがあてられることがほとんどなかった。いっぽう中国や日本の学界でも、この書物が中国語の単語を英語に置き換えるはじめての試行であったにもかかわらず、語学史研究でも歴史研究でも、ほとんど閑却視されてきたといっても過言ではなかった。『華英字典』の書名が称引されるのは、ほとんどの場合、中国における金属活字印刷の起源との関連であり、それゆえ本論文が『華英字典』を正面から採りあげ、その編纂過程や、字典としての詳細な内容、諸文献を引用する姿勢と目的、あるいは書物の編纂を通じて著者が意図した目的を究明しようとする姿勢は、まことに貴重なものと評価できる。

本論文は全3章から構成され、第1章ではモリソン以前の漢語字典の紹介と概括がおこなわれる。モリソンに先行する各種の字典をリストアップして分析し、それと『華英字典』を比較して、モリソンの著書が前代の字典をはるかにしのぐ規模をもち、また文字の釈義や用法の記述以外に、西洋に向けて発信された各種の中国文化情報がそこに内包されていることを詳細に論じている。

第2章は『華英字典』の百科全書的特徴を明らかにする。書物中に引用される『論語』と『詩経』を中心とする文献、および科挙など中国独自の制度に関する情報をとりあげ、それを『康熙字典』と比較して、『華英字典』が幅広い百科全書的な関心と西洋に対する啓蒙的な役割を担って編纂されたことを具体的に示す。この章を通じて浮かびあがる西洋人から見た東洋との文化的ギャップについては、これまでの東西交渉史研究においてもしばしば論じられているが、それを字典という形態を取る書物での記述によって分析したのは、本論文がはじめておこなったところである。

第3章では19世紀までのヨーロッパにおける漢学の主要な業績の中で、モリソン『華英字典』をどのように位置づけるべきかが考察される。比較の対象は19世紀までのヨーロッパにおける経書の翻訳業績であり、それまでのほとんどがラテン語訳であったのに対し、『華英字典』が部分的ではあるにせよ、はじめて経書を英語に翻訳したことが指摘される。これは本論文の精華というべき部分で、この考察は今後のヨーロッパ漢学史研究においてかならず参照されるべき論考となるであろう。

本論文は東西文化交渉史の研究で従来ほとんど未開拓であった分野に鋭い考察を展開している。この論考は中国文化西漸に関する今後の研究活動に向けて重要な足跡を印したもので、東西それぞれの地域を横断する文化交流と環境構築の視点から見ても、まことに優れたものと評価できる。よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。